

ワークショップ報告

「新型コロナウイルス禍を生きる人びと—ラテンアメリカ地域研究からのアプローチ—」

松丸 進（企画者）

日時：2020年11月7日（土）14:00–16:30

開催形態：Zoomによるオンライン開催

<プログラム>

- 14:00 開会の挨拶、趣旨説明、報告者・コメンテーター紹介
司会：中尾実日子（上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科）
- 14:10 報告① 松丸 進（上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科）
「コロンビアの先住民族ワユーと感染拡大防止措置」
- 14:30 報告② 渡邊 翼（上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科）
「職業訓練支援プログラム終了後のメキシコの若者と COVID-19」
- 14:50 報告③ 高橋沙織（早稲田大学大学院人間科学研究科）
「ブラジル北東部セアラ州における with コロナ時代の観光」
- 15:10 休憩
- 15:25 コメント
石丸香苗先生（福井県立大学 准教授）
幡谷則子先生（上智大学 教授）
報告者によるコメントへの応答
- 16:05 参加者（視聴者）の質疑応答
- 16:25 閉会の挨拶
- 16:30 終了

新型コロナウイルス（以下、コロナ）の感染が世界的に拡大した2020年、ラテンアメリカ各国では外出制限措置がとられた。これにより経済活動に困難が生じ、社会・経済的に脆弱な状況にあった人びとの多くが日々の糧と生きる術を奪われた。

本ワークショップは、コロナ禍によりラテンアメリカの人びとがどのような影響を受け、人びとにいかなる生活の変化が生じているのかを明らかにすることを目的とした。コロンビア、メキシコ、ブラジルの事例報告を通して、コロナ禍によって改めて浮き彫りになった

ラテンアメリカの社会・経済・文化に関わる問題を問い直した。人びとは窮地に立たされる一方で、日々を生き抜く方法を模索し、市民間の助け合いの動きも生まれている。各報告では、コロナ禍を乗り越えようとする人びとの実践についても明らかにした。

松丸報告では、コロンビアの先住民族ワユーが、外出制限措置によって生計の維持が困難となっている状況を示した。また、遺体の火葬はワユーの存在論に反するという抗議の声から、コロナ禍におけるワユーとして生きる尊厳の危機について考察した。渡邊報告では、コロナ禍が、メキシコにおける職業訓練終了後の若者に及ぼす影響を検討した。報告者自身がコロナ禍のメキシコに滞在していた経験から、若者たちの求職状況を明らかにした。高橋報告では、観光地として知られるブラジル・セアラ州の観光業従事者のコロナ禍への対応を明らかにした。そして、コロナ禍を経た先の観光運営の変化の行方について考察した。

石丸先生からは、生態学の観点から「レジリエンス（復元力・回復力）」をキーワードとして、多様性が回復度・安定度を高めるというコメントをいただいた。生業やスキルの多様化がコロナ禍の先のレジリエンスに繋がると言及した上で、各報告事例における生業の多様化の可能性について質問をいただいた。幡谷先生からは、もともと社会経済的な格差が大きいラテンアメリカでは、コロナ禍における人びとの助け合いを自助、共助の域に留めることなく、いかに公助につなげていくかを問う重要性を指摘された。それらを受けて、各報告者からも意見が出された。参加者の質疑応答では、各報告に対する様々な角度からの質問やコメントが多く寄せられた。

本ワークショップはコロナ禍という現在進行形の問題を扱うものだが、今般のコロナ禍は元々あった問題の延長線上にあることが再確認された。現在、表出している出来事から国や地域の歴史、社会・経済・文化に関わる問題を考え、再び、現在のコロナ禍、そして将来を考えるという往還が生まれた。その点でとても有意義なワークショップとなった。

今回は、本研究科のシンポジウム・ワークショップシリーズで初めてのオンライン開催となった。システムトラブルや時間超過など企画者の段取りの悪さについては反省点も多い。しかし、30名前後の多くの参加者があったことから、テーマへの関心の高さが窺えた。

ラテンアメリカ地域研究者は、コロナ禍を受けてどのように調査を遂行すべきか、従来とは異なる新たな方法を見出す必要がある。今回のワークショップに向けた各自の調査は、コロナ禍における地域研究の調査方法を確立するための第一歩であったと考えられる。渡航が出来ない状態でもいかに現地の状況を把握することができるのか、有効な方法について今後も検討していきたい。